

所属・資格 心理学科・教授

申請者氏名 横田 正夫

研究課題		大ヒットアニメーションに見る心理学的特徴について
報告の概要	研究目的 および 研究概要	「君の名は。」や「この世界の片隅に」といった大ヒットアニメーションが、老若男女を巻き込んで、大きな話題を呼んだ。これら両作品は、大災害や第二次世界大戦といった個人にとって心理的負荷の大きい状況の中での生活を描いている。そして主人公たちは「感情の谷」といったような大きな感情的な体験を重ねる。そうした感情的な体験を乗り越えることで、個人の成長が得られると語り、大きな感動を呼んでいる。しかし、「感情の谷」に主人公が安心して落ち込めるような状況がそこには出来上がっている。主人公たちを見守る友人たちや家族の存在が大きいのである。そこでこうした作品を素材として現在日本の対人関係の特徴を明らかにすることを目的とする。
	研究の結果	平成30年に公開された作品についてみると「劇場版 若おかみは小学生！」(高坂希太郎監督)では、交通事故で両親を亡くし小学6年の女の子が、祖母の営む旅館の女将として働き始める。彼女は、幽霊を目にすることが出来、旅館に滞在する人たちを元気にする。両親を亡くした心の痛手を持ち、そのショック体験をぶり返すことがあっても、目にする幽霊の援助もあって、それを乗り越える。同年代の友達ができると、幽霊を目にすることもなくなる。ここで描かれているのは、両親を失うというショック体験によって「感情の谷」に落ち込んだ女の子が、幽霊と出会い、幽霊との交流によって、現実適応が可能となったということである。これに対し、「大人のためのグリム童話 手をなくした少女」(セバスチャン・ロデンバック監督)作品では、悪魔の策略によって両手を失い、両親を失い、結婚生活も破たんする女性を描いている。この主人公は「感情の谷」に落ち込んでも、自ら行動し、解決してゆく。ただ「感情の谷」に落ち込んだ際に大地の精霊(大いなる母)の援助があった。
	研究の考察・反省	日本のアニメーションでは「感情の谷」に落ち込んで、そこで出会うのは「劇場版 若おかみは小学生！」にみるように幽霊など、比較的身近な者である。これは原作が子ども向けのものであるといったことも影響しているであろうが、「君の名は。」や「この世界の片隅に」においても同年代の異性であったり、家族であったりするので、他の作品にも共通している。それに対し外国の作品は、「感情の谷」に落ち込んで現れる援助者は、大地の精霊といった大いなるものであって、身近な他者ということではなかった。さらには主人公はあくまで個人で行動するのであり、他者の援助を期待しない。こうしてみると日本の作品は他者の援助を暗黙の裡に前提としており、相互援助をどのように行うかを描くことを、外国の作品は個人の決断とそれに伴う行動を描くことを目的としているといえそうである。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 横田正夫:「映像心理論(アニメサイコロジー):アニメーション研究による「アニメ」の相対化。小川昌宏・須川亜紀子編『アニメ研究入門【応用編】アニメを究める11のコツ』現代書館、2018、pp.9-33	